

はじめに

本書前半では、前著『アダム・スミスの経済思想』で提起した諸論点の再確認と、書評・討論等で提起された質問点への応答を主内容とし、それらを「基本命題」として総括した。その「基本命題」とは、①『国富論』は投下労働価値視点で一貫している。②諸国民の「富」の豊かさは①の価値量によって測られる。これら2点に集約される。本書後半では、その理解と異なるリカード以来のスミス価値論批判への反批判を展開し、マルクスを含む内外の基本文献における一連のスミス誤解を全体的に解明した。その上で、「序論」等で強調したように、「現代経済学はスミス価値論を原理論として再構築されるべきだ」という問題を提起した。また、「補論」には本論の基本命題を側面照射する事典項目と論評を添付した。

以下、次の三点をめぐって本書の問題提起の意味を敷衍してみよう。その第一は、価値と価格、つまり付加価値論と自然価格論との関係如何、第二は、富(使用価値)と価値、つまり商品生産の量・質と価値量との関係如何、第三は、現代経済学とスミス経済理論との関係如何という各論点である。

(1) 価値と価格の関係

先ず、これについてのリカードとマルクスの場合を考えてみよう。

リカード……生きた労働と過去労働との合計量(投下資本量)に比例する利潤量を含む商品価値=商品価格…生産費説

マルクス…… $C+V+M=W$ 商品価値→商品価格=投下資本価格(C+V)+利潤量(投下資本価格×平均利潤率)…商品価値≡商品価格…総商品価値=総商品価格

これらを念頭においてスミスの場合を考えてみると、それは価値と価格を一体化したリカードと違って、両者を区別したマルクスと同じパターンとなっている。ただし、C部分については、価値でなく投下資本の補填費用として価格に一本化している。また、V+Mの部分については、付加価値として一体化した上で、それが価格としての賃金と利潤に分解するとした。利潤量は投下資本価格×利潤の自然率とされ、地代はそれを上回る超過部分からの配分と解されるから、細部は別として、基本的にはマルクス理論と同類型だと言える。両者とも、総価値・総価格一致命題を暗黙の大前提としていたから、価値から価格への転形問題を疑問視する意味が私には理解し難い。元来、経済価値説を提起する者はすべて、この一致命題を必ず前提した上で、その原因を究明しようとするはずだ。

そうすると、私見はマルクス説を補強する議論だと受け止められようが、さにあらず。むしろ、マルクスがスミス価値論を貶めた上で、その理論を社会主義的搾取論として専有化したことがいかに不当であるかを訴えているわけである。要するに、私見は市場社会的価値法則論(内生的成長論)の論拠としての労働付加価値論理解であって、搾取論としてのそ

れ(シュンペーター説)でないことを強調したい。

(2) 富(使用価値)と価値の関係

『国富論』後半のマクロ的議論の中では、スミスは度々「富と収入の増加」とワンセットで表現している。「富」とは消費財=使用価値のことであり、「収入」とは付加価値のことだ。しかしこの両者の関係は必ずしも明白ではない。なぜなら、スミスは使用価値の解明を省き、価値の議論に焦点を絞ると冒頭部分で揚言したからである。にもかかわらず、実際には、「富」が主題とされ、それが多用されている。

その謎を解く鍵はそれらの「増加」論の解明にあると思われる。スミスは「収入」=付加価値の「増加」を最大テーマの一つとしたが、そのための労働価値=労働者数・労働能力を増加させるだけでは、富裕化の意味を成さない。つまり、それらの単なる増加は、賃金コスト→商品単価を高めることによって市場競争力を弱め、販売量減少→収入減少に帰着するだけだから、付加価値の増加それ自体は富裕化の目的に反する。にもかかわらず、富裕化とは付加価値の増加を意味する、とスミスは言う。このパラドックスを解く鍵が「富」=使用価値の増加論の中にあるわけだ。

使用価値の量・質を増加させるためには、ただでは増加できない。そこに何らかの工夫を要する。その起点をスミスは分業に見出した。つまり、分業=労働専一(simple)化により、商品の増産と単価低減(販売量増加)の両面が実現する。また、分業は労働の密度・複雑度向上(才能促進)と機械化を促進する。ただし、商品=使用価値の量を増加させる場合とは、その増加率を下回る割合の範囲内で労働価値→付加価値の増加を要する場合に限られる。つまり、この「下回る割合」であれば、商品単価低下に伴う販売量増加により収入も確保されるからである。その意味で、付加価値=収入の増加は使用価値増加の投影である。

そうすると、労働価値の増加率が低いほど効率的だとはいえ、商品生産の量・質増加に応じて価値もその増加率以内の率で増加する。また、科学者を含む才能向上の度合いに比例して機械等の高付加価値製品の開発が促進され、また、分業効率化による余剰労働が新規製品の製造業部門にシフトすればするほど、その国の総付加価値は増加する。こうして、産業革命のような将来展望を見据えれば、分業を起点とする才能向上が恒常的富裕化の根本原因になる。しかも、一国の総価値増大は支配労働量=購買力の増加でもあるから、やはりそれは富裕化の実質的尺度だと言える。

なお、この問題の系論として、既成機械の改良はその価値を低下させるではないかという疑問が起こりうる。ミクロ的にはその通りだが、しかしスミスの価値増加論はマクロ的レベルに限られている。したがって、このケースもマクロ的に考察されるべきだろう。そうすると、前述の分業論の場合と同様に、機械改良がその単価を低下させても、その低下率以上の割合で販売量が増加すれば、その総価値量は増加する。また、その見込みが無ければ、機械を改良するインセンティブも生じない。なお、この改良労働という「知的財産」が十分に報奨されていなければ、ダンピングにより市場を支配している可能性もある。し

かしこれによる対外市場支配は、結果的には、貨幣流入(自国通貨の為替相場上昇)や頭脳流出により自分(自国)の首を絞めることになる。その意味で、経済原理論の構築に当たっては、価値法則の順当な貫徹を妨げない程度の市民社会的成熟度が想定されなければならない。

これらの議論が通説と大きく異なるように見えるのは、通説がリカード→マルクス以来の「価値一定」論を想定したからであって、この想定をはずせば、労働能力改良(知的財産)→価値増加の論理を加味せざるを得なくなる。そしてスミスは直観的(注1)ではあるが、これを「基本命題」に組み込んでいた。現代経済学にも「人的資源」論があるように、新たな原理論には、これを論理化する課題が与えられていると言えよう。

富と価値に係るもう一つの論点として、いわゆる「余剰はけ口」論が挙げられる。スミスは貿易成立の根拠としてこれに言及したが、リカードは完全競争均衡論・価値一定論という静態的観点からこれを退けた。しかしスミスのその論点は貿易に限られず、国内商業にも含まれている。両者間でなぜこの相違が生じたかは、静態論と動態論の相違のほか、商業活動の独自性分析の有無によるものと思われる。スミス商業社会の構成員は、独立自営で生産者と商人を一身に兼ねているが、やがて商人が独立して商業に専念すると、その商業経費を補って余りある生産量が増加し、その増加余剰分を商人が自他の市場で販売→交換できれば、余剰分の価値が実現され、その余剰生産も維持され、価値増加が定着する。また、新規開発製品の市場開拓をも含め、それと同様のプロセスが不断に促進されていく。それと同じことが諸国間の貿易にも当てはまる。

他方、リカード理論は価値一定を前提し、商業活動を生産活動に一体化・埋没させていたから、このような商業の価値生産奨励(=需要開拓)効果の論理を受け入れる枠組みにはなっていない。したがって、この相違は両者間の方法上の違いに過ぎず、リカードが批判したようなスミス理論の不備には当たらない。つまり、スミスの市場経済観によれば、ここでは常に「余剰」生産の傾向が内在しており、その「余剰」が市場で吸収されるか否かは、商人が開拓する内外市場の需要によって左右される。したがって、過剰生産が恒常化することは本来ありえず、「見えざる手」によって自ずと需給調節されていくという観点だった。それは、「余剰」という不均衡を媒介した均衡化の論理であって、無媒介的に均衡化を論じたリカードとの方法上の相違点である。(注2)

これら諸論点を含めた価値増加論が『国富論』の基本命題の内実である。また、スミスにおけるこの労働価値→付加価値増加の論理に利潤の自然率低下論を含めたところが、マルクスの搾取→窮乏化論との相違点でもある。その上で、市場経済の是非をめぐる相違が両者間の根本的相違であることは言うまでもない。

(3) 現代経済学とスミス理論の関係

労働価値論が現代経済学に対して説得力を失った一因は、それが社会主義説と一体化されたからである。破綻した非市場→社会主義の立場から、市場万能→金融資本主義の破綻を批判しても、それはまともには受け止められまい。しかし労働価値論の本来の元祖がア

ダム・スミスだとすれば、その市民的市場社会論に立脚する労働付加価値論→価値法則論の立場から、現今の金融資本主義の重商主義的性格を改めて説得的に批判することが可能となる。なぜなら、新旧重商主義の双方とも、価値法則論と背反する重金主義的思想に立脚しているからである。つまり、労働でなく貨幣が貨幣を生むという現象に囚われた立論と政策(金融立国)において軌を一にしているからである。生産に対する商業に適正規模という限度があるように、金融商業(経費)にも限度がある。それがスミスによる重商主義批判の核心であった。

このような現代経済(学)の重商主義的性格をスミス視点から指摘した例は、拙著の他には僅かに佐伯啓思氏と田中正司氏の諸著作(注 3)だけだが、それらに共通していることは、従来の学界の議論に囚われていないことだ。従来の学界では、スミス価値論破綻説とそれによる重商主義評価論とが相俟って、現代版重商主義の問題性が見過ごされてきた。他方、マルクス学派の現代批判は先の弱点に加えて、資本主義体制の原理的批判に終始してきたから、とくに重商主義的問題性に焦点が絞られていたわけではない。したがって、それは所詮イデオロギーや思想の違いにすぎず、単なるすれ違いに終わってしまう。

それに対し、スミス視点からの現代版重商主義批判にはそれらの弱みはない。しかしその価値論破綻説が通説化されてきたために、その折角の強みが生かされずにきた。拙著はその通説を克服することを通して、スミス価値論が内包するその強みを、先の視点から生かすべきだと提唱している。今、私たちに求められていることは、現代版重商主義を克服すべき市民的市場社会の確立ではないだろうか。歴史上その理念型に最も接近していた前例がスミス理論体系だと私は考えている。そしてその展望を射程に収めつつ、特にその根底的指針となるべき経済原理論の再構築を問題提起した次第である。

(注)

- 1) 『国富論』第1編第8章、最終パラグラフ
- 2) 根岸隆『経済学の理論と発展』ミネルヴァ書房、2008年、14-31頁
- 3) 佐伯啓思『アダム・スミスの誤算』PHP新書、1999年、110-27頁。田中正司『アダム・スミスと現代』御茶の水書房、2000年、第5章。同『現代世界の危機とアダム・スミス』御茶の水書房、2009年、第2話